

言葉は無くても真情は見ゆる十兵衛が挙動に源太は悦び、春風湖を渡つて霞日に蒸すともいふべき温和の景色を面にあらはし、何もやさしき語気円暢に、斯様打解けて仕舞ふた上は互に不妙ことも無く、上人様の思召にも叶ひ我等の一分も皆立つといふもの、嗚呼何にせよ好い心持、十兵衛汝も過してくれ、我も充分今日こそ酔はう、と云ひつゝ立つて違棚に載せて置たる風呂敷包とりおろし、結び目といふたつかさねかきもの、十兵衛が前に置き、我にあつては要なき此品の、一ツは面倒な材木の委細いで二束にせし書類いだし、十兵衛が前に置き、我にあつては要なき此品の、一ツは面倒な材木の委細い当りを調べたのやら、人足軽子其他種々の入目を幾晩かかゝつて漸く調べあげた積り書、又一ツは彼所を何して此所を斯してと工夫に工夫した下絵図、腰屋根の地割だけなもあり、平地割だけなのもあり、初重の仕形だけのもあり、二手先または三手先、出組ばかりなるもあり、雲形波形唐草生類彫物のみを書きしもあり、何より彼より面倒なる真柱から内法長押腰長押切目長押に半長押、椽板椽かつら龜腹柱高欄垂木榑肘木、貫やら角木の割合算法、墨縄の引きやう規尺の取り様余さず洩さず記せしもあり、中には我の為しならで家に秘めたる先祖の遺品、外へは出せぬ絵図もあり、京都やら奈良の堂塔を写したりたるものもあり、此等は悉皆汝に預くる、見たらば何かの足しにもなる、と自己が精神を籠めたるものを惜気もなしに譲りあたふる、胸の広さの頼母しきを解せぬといふにはあらざれど、のつそりもまた一ト気性、他の巾着で我が口濡らすやうな事は好まず、親方まことに有り難うはござりまするが、御親切は頂戴いたも同然、これは其方に御納めを、と心は左程に無けれども言葉に膠の無さ過ぎる返辞をすれば、源太大きに悦ばず。此品をば汝は要らぬと云ふのか、と慍を底に匿して問ふに、のつそり左様とは気もつかねば、別段拝借いたしても、と一句迂濶り答ふる途端、鋭き気性の源太は堪らず、親切の上親切を尽して我が智慧思案を凝らせし絵図まで与らむといふものを、無下に返すか慮外なり、何程自己が手腕の好て他の好情を無にするか、そもそも最初に汝めが我が対岸へ廻はりし時にも腹は立ちしが、じつと堪へて争はず、普通大体のものならば我が庇蔭被たる身をもつて一つ仕事に手を入るゝか、打擲いても飽かぬ奴と、怒つて怒つて何にも為べきを、可愛きものにおもへばこそ一言半句の厭味も云はず、唯々自然の成行に任せ置きしを忘れし歟、上人様の御諭しを受けての後も分別に分別渴らしてわざわざ出掛け、汝のために相談をかけてやりしも勝手の意地張り、大体ならぬものとても堪忍なるべきところならぬを、よくよく汝を最惜がればぞ踏み耐へたるとも知らざる歟、汝が運の好きのみにて汝が手腕の好きのみにて汝が心の正直のみにて、上人様より今度の工事命けられしと思ひ居る歟、此品をば与つて此源太が恩がましくでも思ふと思ふか、乃至は既慢気の萌して頭から何の詰らぬ者と人の絵図をも易く思ふか、取らぬとあるに強はせじ、余りといへば人情なき奴、あゝ有り難うござりますると喜び受けて此中の仕様を一所二所は用ひし上に、彼箇所は御蔭で美う行きましたと後で挨拶するほどの事はあつても当然なるに、開けて見もせず覗きもせず、知れ切つたと云はぬばかりに愛想も管もなく要らぬとは、汝十兵衛よくも撥ねたの、此源太が仕た図の中に汝の知つた者のみ有らつや、汝等が工風の輪の外に源太が跳り出ずに有らうか、見るに足らぬと其方で思はば汝が手筋も知れてある、大方高の知れた塔建ため前から眼に映つて気の毒ながら批難もある、既堪忍の緒も断れたり、卑劣い返報は為まいなれど源太が烈しい意趣返報は、為る時為さで置くべき歟、酸くなるほどに今までは口もきいたが既きかぬ、一旦思ひ捨つる上は口きくほどの未練も有たぬ、三年なりとも十年なりとも返報するに充分な事のあるまで、物蔭から眼を光らして睨みつめ無言でじつと待つてゝ呉れうと、気性が違へば思はくも二度終に三度めで無残至極に齟齬ひ、いと物静に言葉を低めて、十兵衛殿、と殿の字を急につけ出し叮嚀に、要らぬといふ図は仕舞ひましよ、汝一人で建つる塔定めて立派に出来やうが、地震か風の有らう時壊るゝことは有るまいな、と軽くは云へど深く嘲ける語に十兵衛も快よからず、のつそりでも恥辱は知つて居ります、と底力味ある楔を打てば、中々見事な一言ぢや、忘れぬやうに記憶えて居やうと、釘をさしつゝ恐ろしく睥みて後は物云はず、頓て忽ち立ち上つて、嗚呼飛んでも無い事を忘れた、十兵衛殿寛りと遊んで居て呉れ、我は帰らねばならぬこと思ひ出した、と風の如くに其座を去り、あれといふ間に推量勘定、幾金か遣して風と出つ、直其足で同じ町の某家が鬨またぐや否、厭だ厭だ、厭だ厭だ、詰らぬ下らぬ馬鹿馬鹿しい、愚図愚図せずと酒もて来い、膳の達者な若い衆頼も、我家へ行って清、仙、めるか、小兼春吉お房蝶子四の五の云はせず掴むで来い、膳の達者な若い衆頼も、我家へ行って清、仙、鐵、政、誰でも彼でも直に遊びに遣すやう、といふ片手間にぐいぐい仰飲る間も無く入り来る女共に、今晚なぞとは手ぬるいぞ、と驀向から焦躁を吹つ掛けて、飲め、酒は車懸り、緒口は巴と廻せ廻せ、お房外見をするな、春婆大人ぶるな、えゝお蝶め其でも血が循環つて居るのか頭上に鼬火花載せて火をつくるぞ、さあ歌へ、ぢやんぢやんと遣れ、小兼め気持の好い声を出す、あぐり踊るか、かぐりもつと跳ねる、やあ清吉来たか鐵も来たか、何でも好い滅茶滅茶に騒げ、我に嬉しい事が有るのだ、無礼講に遣れ遣れ、と大将無法の元気なれば、後れて来たる仙も政も煙に巻かれて浮かれたち、天井抜けうが根太抜けうが抜けたら此方の御手のものと、飛ぶやら舞ぶやら唸るやら、潮来出島もしほらしからず、甚句に鬨の声を湧かし、かつばれに滑つて転倒び、手品の太鼓を杯洗で鐵がたゝけば、清吉はお房が傍に寐転んで銀釵にお前其様に酢ばかり飲んでを稽古する馬鹿騒ぎの中で、一了簡あり顔の政が木遣を丸めたやうな声しながら、北に峨々たる青山をと異なことを吐き出す勝手三昧、やつちやもつちやの末は拳も下卑て、乳房の脹れた奴が臍の下に紙幕張るほどになれば、さあもつ此処は切り上げてと源太が一言、それから先は何所へやら。